

Title	忠阿上人の生涯
Author(s)	中山, 一麿
Citation	詞林. 2010, 47, p. 37-49
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67612
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

忠阿上人の生涯

緒言

岡山県下の寺院調査を始めて早くも五年になる。きっかけは、善通寺の調査でお世話になっていた当時の善通寺教学部長生駒琢一師の御自坊に関する調査を願ひ出た事に端を発する。早くから調査許可を得ながら中々その機会を作れずだったが、平成十八年度に「寺院所蔵文献を中心とした、西国文化圏および伝播ルートの解明に関する基礎的調査研究」と題した中川真弓氏との共同研究で福武学術文化振興財団の研究助成を獲得し、報恩大師ゆかりの宝泉寺の調査を中心に行った。加えてその傍らで、生駒師御自坊の瓶井山安住院の調査も始めた。

安住院には寺の基本資料である勸進帳や縁起、歴代領主からの判物、貴家からの寄贈に依ると思われる古筆切れなど、所謂寺宝類の他に聖教類が大型の段ボール箱に五箱、鮎詰めに保管されていた。しかし、その段ボール自体も腐食が進んでおり、先ずは虫干しを兼ねて段ボールから全ての典籍を出

し、新たな段ボールへの詰め替えをする作業を中川氏や院生数名の手を借りて行った。又、此の時安住院に会陽に関する貴重な典籍があることを知り、西大寺会陽との比較検討が研究課題として浮上してきたのである。

十九年度には「会陽（はだか祭り）の起源と展開に関する文献学的資料調査研究」と題して福武学術文化振興財団の研究助成を獲得し、西大寺の調査にも着手した。また、科学研究費補助金若手研究（B）「安住院蔵書調査を基盤とする西国文化圏と伝播ルート解明に関する基礎的研究」も採択され、安住院聖教の本格的調査も開始した。

以後現在に至るまで、安住院の蔵書調査はアルバイト作業員一人を伴って行い、所謂寺宝典籍と聖教類を併せて細目にして三千点余り、全体の八割程度の典籍に関して撮影と仮目録作成を行ってきており、平行して典籍番号の挟み込み、及び中性紙段ボール八箱への再分配をして、整理・保存にも尽くしている。又、安住院所蔵の佛像・絵画類についても、大阪大学東洋美術史院生（当時）の協力を得て、整理途中にあ

中山 一麿

る。

一方で県下の関連寺院にも調査の範囲を広げ、これまでに門を叩いた寺院は十カ寺を超える。中には調査途中の寺院や調査許可を得ながら実行出来ていない寺院もあり、この場を借りてお詫び申し上げる。文献調査には時間がかかる故の事とご理解願ひ、ご寛恕を乞うばかりである。とは言え、散逸の危ぶまれる文化遺産の所蔵確認だけでもしておく事は急務と考える故、今後も多く寺院にご協力を依頼していく覚悟である。幸い二十二年度も「備讃地域の高僧と文化―増味・忠阿・蓮體の足跡を中心に―」と題して福武学術文化振興財団の研究助成を獲得できた。また新たな科学研究費補助金も申請中である。

会陽に関する研究は、当初安住院の貴重典籍の位置付けを目論んで始めたが、比較対象の西大寺会陽を調べるうちに、西大寺会陽自体、ほとんど研究されておらず、特に江戸前期以前の初期段階については全く不明であり、先ずは西大寺会陽の精査を行う必要を感じた。従って西大寺会陽の創始者とされる忠阿の研究は避けることのできない課題であった。

偶然にもこの研究が、西大寺会陽五〇〇周年記念と重なり、「西大寺会陽創始 忠阿上人のゆかりの寺を訪ねる」(於：室山満願寺慈眼院・共催：西大寺会陽五〇〇周年記念事業実行委員会、西大寺観音院、満願寺慈眼院)と銘打った関連事業として「忠阿上人慰霊法要」や「忠阿上人顕彰碑除幕式」などの行事が

行われ、山陽新聞社をはじめとする中国地方の報道機関が取り上げるところとなった。

本稿ではその時私が行った講演録を掲出する。既に『佛教文学』三四号に掲載した「金陵山西大寺会陽起源の周縁について―忠阿創始説の背景―」と重なる点も多く、また研究者には冗長に過ぎる点も多々あると思うが、地元信者や行政機関なども読者層に想定してのこと故とご理解賜りたい。

また、紙面にするにあたっては講演時の手控えを基に成稿した。故に実際の講演とは言い回しなどが異なる部分もある。また、成稿に際して一部内容を割愛、増補した。

【講演録】

「忠阿上人の生涯」

ただ今紹介に預かりました、大阪大学招聘研究員の中山一磨と申します。

ご承知の通り岡山県最大の祭りである会陽も五〇〇年を迎えていると言われております。その節目の年に、会陽の創始者と伝えられている忠阿上人を讃仰する法要が行われる運びとなりました事を心よりお慶び申し上げます。

また、この記念すべき日に、お招き戴き、皆様の前でお話しさせて戴ける栄誉を賜りました事を、西大寺坪井全広ご住職・満願寺慈院院長井秀誠ご住職、及び関係各機関の皆様が心より感謝申し上げます。

あいにくの天候となりお足元の悪い中、たくさんの方にお集まり戴き感謝します。今日ご参集の皆様は、満願寺慈眼院の檀家の皆様、西大寺会陽実行委員会関連の皆様、報道関係者、それに郷土史家や一般の方々とお聞きしておりますが、ほとんどの方が日頃學術研究の話をお聞きになる事など無いと思います。出来るだけ解りやすくと思っておりますが、聞き慣れない用語等も出てくるかと思しますので、あらかじめこれからの話の内容をお手元のプリントに記しておりますので、適宜ご参照戴ければ幸いです。

私は、現在は大阪大学で研究員をしており、出身も大阪で

ありますが、阪大に入りましたのは大学院の博士課程からで、学部から修士課程までは岡山大学に在学しておりました。そして、岡大在学中に裸祭りというものがある事を知りました。しかし、その頃はもっぱら、柔道部の友人が後期試験が終わると、宝木獲得の作戦を練っていたのを端で聞いていた程度で、今この場で皆様方を前にしてお話するような縁を賜るとは、想像も出来ませんでした。日頃、調査で岡山の地を踏む度に、この土地との縁を感じております。本日は、県民の皆様のご関心も高い、裸祭りに関連するお話をさせて戴けるということですので、これまでのご恩に僅かでも報いることが出来れば幸いと思っております。

私は元々日本の中世文学を専門としております。阪大に進学後は、主に寺院が所蔵する古写本の調査をするようになり、文献学を基盤にした仏教文化史の解明に関心を持って研究を行っております。近年は備讃地域の寺院を調査する機会が多く、岡山市国富の瓶井山安住院や香川の善通寺などを頻繁に調査させて戴いております。今後も関連寺院へ調査の範囲を広げていきたいと思っておりますので、お近くで見かけられた折には不審がらずに思い出して戴ければ幸いです。

*

*

寺院には何百年もの間受け継がれてきた多くの文化遺産が残っております。多くの場合、それらは地元の教育委員会や博物館によって調査されるのですが、人員や採算性の問題か

ら断片的調査しかされていないことがほとんどです。中でも、文献の調査というのは一カ寺で、建築・仏像・絵画などが多くても数百点であるのに対し、数千・数万点に及ぶ事もあり、しかも一つ一つの文献の判読にも非常に時間がかかります。更に仏像や絵画の様に一般人々が見てあまり楽しいものでもありません。その為にこれまで主だったもの以外には十分な調査をされることが無かった訳です。特に私などが好んで調査している、経典や法要に関する説明や仕方などを記した次第書・師匠からの教えを受けて相承する伝授関係書・お坊さんが自らの勉強の為に使った手控えの書や様々な雑書類、

こういったものを我々は聖教と呼んでいます。この聖教に關しては全く手付かずと言って過言ではありません。これまではこの聖教類はお寺内部の秘書として扱われる事が多く、寺内関係者、更に物によっては住職のみしか閲覧が許されないものでもありました。しかし、現代社会になってお坊さんも印刷出版物で勉強するのが一般化し、数百年続いていた書写による書物の継承が途絶えてしまい、現在では多くの場合、お寺の中でも使われなくなっています。その為に多くの聖教典籍が蔵の奥に仕舞い込んであるという状況になっており、未だに存在すら知られていないものがたくさんあるわけです。私が西大寺を訪れましたのも、そう言った文献類を調査させて戴くためでありました。幸いと言いますか、残念ながらと言いますか、西大寺には既に知られているもの以外に忠阿

上人が活躍された室町期まで遡れる文献は今のところ確認できておりません。しかし江戸中期以降の資料は確認でき、今後それらを使って江戸時代の西大寺と会陽の模様を考えてみたいと思っております。

*

*

さて、本日私が拜命致しましたテーマは「忠阿上人の生涯」というものであります。しかしこれは非常に難題であります。なぜなら西大寺関係者、或いは研究者の中でも忠阿上人という方について語れと言われても、「紀州の人で、会陽を始めたと伝えられている人」と言う以外には何も解らないというのが現状であります。ましてや一般の人々に於いては、岡山県下で裸祭り知らない人はほとんど居ないと思われませんが、その中の何パーセントの方が忠阿上人というお名前を知っていらっしゃるでしょうか。決して多くはないでしょう。これはやむを得ない事でありまして、実は忠阿上人に関する資料というのが、極めて乏しいのです。

そのような状況の中、唯一の文字資料が『永正本西大寺縁起』にある次の記事です。

web公開に際し、
画像は省略しました

永正四年（一五〇七）に書かれたこの縁起は、正しく忠阿上

人が活躍されたその時代に書かれたものです。そしてここには、忠阿上人が、紀州の人だということ、西大寺の再興を志していたことが書かれています。会陽の事は全く書かれておりません。

一方、会陽の事を最も早く記しているのは、それから百五十年余り後の寛文元年（二六六）に書かれた『西大寺縁起』で、そこでは会陽を始めたのは西大寺開山上人の安隆上人ということになっております。しかも忠阿上人の事は全く触れられていません。

会陽の開始と忠阿上人の二つの事柄を併記するのは、更に百五十年程経た、享和年間成立の『吉備温故秘録』という吉備地方の伝承を集めた文献で、ここで初めてこの二つの事が関係づけられるのです。即ち『吉備温故秘録』の西大寺に関する記述部分には次のように出てまいります。

画し、際に公開web
し、省略し
た

とあり、ここで初めて、忠阿上人が会陽を始めたと言われているのです。しかしこれは、忠阿上人が活躍した時代から三百年も後の伝承であり、その間にどうして忠阿上人がこのよ

うに語られるようになったのか解らないのです。その為に忠阿上人と会陽の関係はあくまで、「伝承では」として語らなければならなかった訳です。

そこで私は、西大寺の中興上人と言われ、会陽の創始者と伝えられる忠阿上人とはどういう人物であったのかを、出来るだけ忠阿上人が活躍した時代の資料に基づき、また、近年の寺院史研究の成果を加味して、明らかにしたいと思っただけです。

ところが先ほど申しましたように、西大寺には忠阿上人に関する資料がもう残っておりません。そこで、忠阿上人に関するもう一つの伝承である、満願寺の五輪塔に興味をもち、満願寺を訪れたわけです。

実は此の時、私には忠阿上人に関する一つの予測がございました。結論を先取りすることになりますが、忠阿上人とは、「熊野から来た時衆僧である」という予測です。熊野から来たという点につきましては、忠阿上人が紀州の人であることと、牛玉寶印と言えば熊野が最も有名であることから、これまでもある程度予測されておりました。しかし、時衆僧であることについては、全く考えた人はいないでしょう。

満願寺について、お話しする前に、どうして私があるような予測に至ったのかをお話ししますと、西大寺の収蔵庫を調査しておりますと、もちろん文献を中心に調査しているわけ

でございますが、その他にも色々なものが出て参ります。私は文字資料に基づいた研究を行っておりますので、書物の他にも自然と版木に目が留まります。西大寺の収蔵庫には恐らく未だ誰もまともに見ていないだろうと思われる版木がミカン箱ぐらいの段ボールにいっぱい保管されております。時代も種類もまちまちで、本尊や牛王寶印に関する版木もありますが、その中に「奉唱念佛一百万遍合息」等と念仏に関する版木が数種類確認できたのです。真言寺院であるはずの西大寺に陀羅尼を彫った版木があるのは当然の事ではありますが、念仏に関する版木が複数個ある事に、少し不思議な思いを持ちました。しかしお寺の蔵からわからない物が出てくることは良くある事なので、その時は「色々出てくるな」というぐらいの感覚でございました。それから暫くしてまた西大寺を訪れた時に、ふと中庭の石塔に阿弥陀が彫られていることに気づきました。しかもその石塔は長祿二年（一四五八）のもので忠阿上人の時代より更に数十年前のものでございます。そこで西大寺にはどうも室町時代から阿弥陀信仰が根付いていたのかもしれないと思い、その時はたと思いついたのです。忠阿とは阿弥号ではないかと。

この阿弥号とは何かと申しますと、仏教には多くの経典が存在しますが、その中どのどの経典を重視するかということで、宗派が別れております。例えば真言宗であれば大日経、天台宗は法華経、華嚴宗は華嚴経といった具合になります。

の中で、浄土経典を重視するのが浄土宗、浄土真宗、時宗、融通念仏宗などがあります。この浄土教諸宗派が主尊として信仰するのが阿弥陀如来であります。古来これらの宗派のお坊さん達は好んで、自らの法号に阿弥陀の「阿」の字をつけておりました。そのような法号を阿弥号と言うわけですが、忠阿の「阿」も、もしかするとこの阿弥号かもしれないと思いついたのです。そうだとすると、忠阿上人は浄土教系の宗派のお坊さんであるということになるわけですが、この発想が、その後の道筋に光を灯すことになります。

私は先ほど忠阿上人を更に限定して熊野から来た時衆僧であると申しましたが、次にその説明を致しますと、実は先ほどみた忠阿上人に関する唯一の文字資料である『永正本西大寺縁起』には、忠阿上人が紀州の人であるという他にも一つ重要な情報が記されているのです。即ち、忠阿上人は「十穀聖」であるという記述です。

十穀聖とは、十の穀物を絶つという穀断の行を行っている聖を意味しますが、そういったお坊さん達が主な拠点としていたのが、紀州の熊野や高野山でした。そして彼らはそこから様々な地域に向いて行って、多くのお寺の造営修理を助ける勸進活動を行っていた事も解っています。そして更に彼らの多くが、念仏を書いた御札を配り歩く時衆僧であったと言われており、阿弥号を名乗っているものも多く存在していたのです。

紀州の人で、西大寺の復興を志し、阿弥号を持つ忠阿上人とは正しくこの十穀聖の性格に当てはまる人物と言えるのであります。

さて、このような見通しを持ちつつ満願寺を訪れたわけですが、果たして忠阿上人の墓と言われる五輪塔をいくら眺めてみても、疑問しか思い浮かびません。即ち、どうしてこの塔が忠阿上人の五輪塔と言われているのか？仮にそれが事実であったとして、何故、満願寺にあるのか？満願寺と西大寺は何か関係があるのか？という具合です。

そこで、今度は慈眼院さんを訪れ、長井ご住職にお寺に残る文化資料の閲覧をお願いに伺ったわけです。

夕方突然の訪問という非礼にも拘わらず、大変丁寧に色々な所蔵品をみせて戴きましたことを改めて感謝致します。本日はまた、ご無理を言って、その中から今日のお話しに関係するものを出して戴いております。

先ず満願寺には大変立派な『阿弥陀三尊来迎図』があります。しかもこれは忠阿上人の時代と同じ室町期の作と思われます。更に、西大寺にもありました百万遍念仏に関する版木が残っております。阿弥陀信仰の形跡がみられるわけで、私としては、少なからず期待が膨らむ思いがしたのを覚えております。

そして注目されるのは、「諸病黄瓜加持」の版木でありま

web公開に際し、画像は省略しました

阿弥陀三尊来迎図

す。そこには

と彫られているのです。これは明らかに西大寺との関係を示す資料であります。但し、この版木は恐らく江戸時代の後期に下るものと思われ、忠阿上人が活躍された室町後半の状況を理解する資料とはなり得ません。

忠阿上人の時代に近づく資料として注目されるのは、寧ろ「千手観音立像」の版木であります。ご覧の通り大変立派な版木であり、江戸初期のものとして注目されます。普通に考えますと、このような立派な版木は当然、満願寺の御本尊を模ったものと考えられるのですが、しかし、満願寺の御本尊は千手観音像ではありますが、坐像なのです。従ってこの版木のモデルは満願寺の御本尊ではありません。では何処の仏様を模ったのでしょうか。

実はこの版木と非常に良く似た版木が西大寺に御座います。

こちらは安政三年と江戸末期の版木ですが、西大寺の御本尊を模ったものです。満願寺のものと比べますと、後背の形、模様、台座の形、大きさ、更に台座にかかる羽衣の曲線に至るまで、瓜二つと言ってもよいでしょう。つまり満願寺の版木に彫られている像は西大寺の御本尊であると判明するので

web公開に際し、画像は省略しました

web公開際し、画像は省略しました

満願寺蔵「千手観音立像」版木乾拓

西大寺蔵「本尊」版画

す。このことは即ち、江戸初期には満願寺で西大寺の本尊が刷られて配られていた事を示しています。

*

*

さて、ここまでくると、注目すべき記事が出て参ります。それは『寛文本西大寺縁起』にある、次のような記事です。

web公開に際し、翻刻は省略しました

天文三年（一五三五）に快乗という十穀の上人が室山、即ちここ満願寺に居住して、西大寺の勧進活動を行っていたというのです。注目されるのは、先ず時代が天文三年ということとで、忠阿上人が活躍した時代から三十年と経ていないということです。そして、快乗とは忠阿上人と同じ十穀聖であります。即ち、熊野から来た十穀聖がこの頃満願寺に居住して、西大寺の勧進活動を行っていたことが記されており、この意味は決して小さくありません。

と言いますのも、十穀聖とは所謂熊野の勧進聖達を指していることは先ほども述べましたが、彼らの活動の特徴として、ある寺院の勧進活動を行う場合、元々彼らはその寺院の内部のお坊さんではないので、自分たちの活動拠点を、勧進すべ

き寺院の近くに築く必要がありました。この拠点を本願所と言いい、その任を本願職と呼ぶのですが、彼らはそこで寝食をして、在地の人々に喜捨を求め、布教活動を行ったのです。彼らの行う布教活動は民衆を対象とし、熊野の聖として牛王寶印を配り、また、時衆僧として念仏札を配るといったものでありました。

さて、このことを踏まえて西大寺と満願寺の関係を考えますと、文禄四年（一五九五）の『西大寺文書』の中に「田畠之上中下を引合、西大寺本願へ可相渡、」とあります。これは明らかに「西大寺本願」と呼ばれる場所、或いは人がいたことを示しております。つまりこのことから江戸時代より以前に、既に西大寺に本願所があったことが判明するのです。

一方、満願寺に現存する数点の絵画類に「本願慈院院有傳」という記録が確認出来ます。本日はその中の室町期製作

web公開に際し、画像は省略しました

愛染明王図

と考えられる『愛染明王図』を出して戴いております。ご覧のようにこの裏面には修復時の押紙があり、

とあります。また、現在兵庫県立歴史博物館に所蔵されている重要文化財の『仏涅槃図』は元々此処慈眼院の什物でありましたが、この涅槃図にも同じく享保四年（一七一九）七月に本願慈眼院有傳による修復を示す紙片が付属しております。有傳は此の時満願寺本坊であった慈眼院の住職でありました。精力的に慈眼院の什物の修理を行っていた事が見えてきます。そして自身を本願と名乗っていることから慈眼院住職が本願職の任に当たっていたことが解ります。更に、現在は既に失われていますが、元和二年（一六一六）に作られた満願寺旧梵鐘に刻まれた銘文にも「本願一乗院清陽」の勸進によって作られた旨が記されています。院家こそ一乗院になっていますが、江戸時代の初期には既に満願寺内に本願職が設けられていたことが判明致します。

このように西大寺側の資料と満願寺側の資料を付き合わせて考えてみますと、西大寺と満願寺の関係は忠阿上人の時代まで遡って考えても大過無いと言えるでしょう。遅くとも室町末期には正式に満願寺が西大寺の本願所となっていたことは間違いありません。その後本願所としての機能がいつまで続いたかは判然としませんが、先ほど述べました「諸病黄瓜加持」の版本に「西大寺奥之院」と刻まれることから、江

戸時代の後期から末期にかけては西大寺の奥の院としてその関係は継続していたものと考えられます。

* * *

以上の明らかとなつて参りました事を踏まえて、忠阿上人が果たした役割について考えてみたいと思います。忠阿上人が登場する以前の西大寺は、実は禅宗の僧たちが中心になつて運営をしておりました。『西大寺文書』をみてみますと『永正本西大寺縁起』より以前の西大寺は禅宗のお坊さんである清平寺住職が西大寺を取り仕切っていたことが分かります。また西大寺の勸進活動も禅僧によつて書かれた漢文の『勸進帳』によつて行われておりました。格調高い漢文で書かれた文章は寺院の歴史を顕彰して寺格を高らかに唱えるのに適していますが、一方で庶民には読むことも理解することも難しいものであつたと思われれます。それに対して、忠阿上人の登場とともに作られた『永正本西大寺縁起』は平仮名と絵を用いて書かれており、見る者が楽しみながら内容を理解できるようになつております。

私はこの漢文の『勸進帳』から平仮名と絵の『縁起』への変化にこそ、西大寺の一大転換があつたものと思つております。即ち、西大寺の勸進活動が禅僧による一部権力者の庇護を目的とした活動から、熊野系の時衆僧による広く一般庶民を対象にした活動へと変化したものと考えております。前者による権力者の財力に頼つた再興事業は自ずと民衆には過度

の賦役を課することになりかねません。しかし、後者は町で民衆に交わり、西大寺観音の御利益を絵を以て解り易く説き、民衆一人一人に利益を保証する牛王寶印や念仏札を配つて回つたのです。それ故、群衆がその札を奪い合うという事が起こつてきたのでありましょう。

しかしこれは誰が行つても起こりうる現象ではないでしょう。先ほども述べましたが、西大寺には忠阿上人以前から阿弥陀信仰があつた痕跡があります。恐らく忠阿上人より以前から熊野系の時衆僧が往来していたと思われれます。しかし忠阿上人ほどのインパクトを残す事はありませんでした。抑も彼らは西大寺内部の僧からすると余所者であります。従つて忠阿上人が後に西大寺中興上人とまで呼称されるのは異例の事と言えるでしょう。因みに当時、弘治三年（一五五七）までは、主要な西大寺の文書は全て清平寺を通して遣り取りされている事が現存する『西大寺文書』から解ります。従つて忠阿上人の後も暫くは禅僧中心の寺院運営であつたと考えられます。西大寺に残る歴代住職の墓地に忠阿上人の墓が見られないのもそういった理由によると考えられるのです。

つまり本来であれば、忠阿上人も西大寺の歴史に名を残すお坊さんでは無かつたと言えます。にもかかわらず忠阿上人が中興と成り得た理由は、西大寺に來た時期にあります。明応四年（一四九五）に西大寺は火災によりほぼ全焼します。忠阿上人の登場はその全焼した西大寺の復興期で、これまで

以上に大規模な勸進活動が必要であった時期だったので。その為西大寺内部の僧に遠慮することなく、遺憾なく忠阿上人は勸進活動能力を發揮出来たのでしよう。恐らく人物的にも人々を惹きつけるカリスマ性を備えたお坊さんであったのでしよう。それ故民衆が群がり、長く記憶に残ったものと思われまます。先ほど述べましたように、『西大寺文書』に清平寺が見られるのは弘治三年（一五五七）までです。そして「西大寺本願」と見られるのが文禄四年（一五九五）です。これは清平寺の退転と反比例して西大寺本願職の責務が重くなったことを意味しています。恐らくこの間に忠阿上人を中興とする姿勢が西大寺に根付いたものと考えられます。

*

*

最後に忠阿上人についてまとめおきますと、忠阿上人とは「時衆系熊野の廻国聖」であります。明応四年に西大寺が焼失した後に、熊野より西大寺の復興を願って当地に下向されて来ました。室山満願寺に居住して此処を西大寺勸進活動の拠点とする本願所とし、一般庶民の中に混じり、西大寺観音の御利益を説き、牛王寶印と念仏札を配り歩いたと考えられます。この活動が見事に民衆の心を捉え、西大寺は復興を成し遂げました。それ故後に、忠阿上人が中興上人と言われるようになったのでしよう。

民衆を主たる対象とした忠阿上人の辻説法、そしてそこで配られる牛王寶印や念仏札を多くの民衆が欲した事も想像に

難くありません。このような日頃の地道な勸進布教活動があつてこそ、正月修正会の後に配られる寶印に特別な意味を持った群衆が、それを奪い合うということが発生したのでしよう。忠阿上人の時代にどこまで現在の会陽との共通性を認められるかと問われれば、甚だ心許ない限りですが、会陽発生の契機は紛れもなく忠阿上人の布教活動に起因しています。従つて、会陽の起こりを忠阿上人に託することは必然の結果と言えるのでしよう。

web公開に際し、画像は省略しました

『永正本西大寺縁起写』忠阿上人

web公開に際し、画像は省略しました

忠阿上人五輪塔

そして、本日の主役である満願寺の五輪塔であります、繰り返しになりますが、ここ満願寺は西大寺の本願所でありました。そしてその基礎を築いたのが忠阿上人であります。これまで、なぜここに忠阿上人の墓があるのかが分からない為、懐疑的な見方が多かったと思いますが、ここに至って、この五輪塔は忠阿上人のお墓として最もふさわしく、在るべき場所に在るお墓ということができるとは思います。

*

*

尚、本日私が用意して参りましたお話しはここまでですが、今日ここに来て、西大寺のご住職より貴重な発見があったことを告げられました。本日の法要にあたって西大寺にある忠阿上人のお位牌をお持ちしたところ、その裏に忠阿

上人の寂年が記されていたということでもあります。そこには次のように記されております

web公開に際し、画像は省略しました

お位牌自体は忠阿上人の亡くなられた時代まで遡れるものでは無く、後代に作られたものでありますが、お位牌という性質上、軽々にこの記述を疑うべきではありません。寧ろ元々あった位牌を作り直したか、確かな根拠に基づいて作られたものとも考えられます。

その上でこのお位牌の記述を見ても、先ず「修正会開創之師」とあります。西大寺でいつ頃から修正会が執り行われていたかは、確かな資料がありませんが、近隣の金山寺や弘法寺で十四世紀前半に既に行われていたことを考えると、西大寺でも忠阿上人の登場以前から行われていたと考えるのが自然であります。また、先ほど私が述べましたように、忠阿上人は元々は西大寺内部のお坊さんではありません。従って修正会のような重要な法要を西大寺で開創するのは考え難いと思われれます。ですのでこの記述には聊か疑念が沸きます。続く「伯耆國十石茶屋之産」という記述からは伯耆國十石茶屋の生まれであることが解りますが、『永正本西大寺縁起』では「紀州人なり」とされておりました。また「十石茶屋」とは現岡山県真庭市の三坂山付近の峠と考えられ、岡山から大山に通ずる道程で最も険しい山道と言われていたようです。

但し、此処が十石茶屋と呼ばれるのは寛政年間（一七八九—一八〇二）以降とされており、この記述にも難があると言わざるを得ません。しかし何の言われも無く記される事も考え難く、或いは伯耆の国で生まれた後、紀州に修学していたとも考えられるでしょう。

次に「大永三年庚午年三月廿四日終焉」という記述ですが、大永三年（一五二三）にお亡くなりになったというのは、永正四年（一五〇七）に作られた『縁起』に「今こゝに忠阿といふ十穀のひしりいませり」という記述からしても相応しい年次と言えます。しかしながら大永三年の干支は「癸未」であり、「庚午」とするのは明らかな誤りであります。しかもこの誤りがどうして起こったのかは想像が付きません。忠阿上人に関する唯一の確かな文字資料である『永正本西大寺縁起』が作られた永正四年の干支が「庚午」なのであります。

以上のことを考え合わせますと、この位牌は西大寺で忠阿上人が中興と言われ、会陽の創始者として語り継がれるようになった後、恐らく十石茶屋が出来た寛政年間以降に、忠阿上人の位牌が西大寺内に無いのを惜しんで新たにその当時の資料や伝承を取り合わせて作ったものと考えられます。干支の誤りはそういった事情から起こったものでしょう。従って虚実入り交じっていると思われるが、現在では失われた、伯耆国に生また事や大永三年に亡くなった事を示す資料もあつたと考えられ、誤りを含むからといって全てを否定すべ

きでは無いと考えます。

従って是非とも来るべき五〇〇回忌法要の準備をされる事を切に願って私の話を終えたいと思います。ご静聴戴き感謝申し上げます。

【主要参考文献一覧】

- ・ 『西大寺会陽記録保存報告書』西大寺会陽記録保存委員会 1980.6
- ・ 『岡山県の会陽の習俗』岡山県文化財保護協会 2007.3
- ・ 藤井駿・水野恭一郎共編『岡山縣古文書集』第三輯（1956初版、1981復刻）
- ・ 『備前四十八カ寺 近世備前の霊場と報恩大師信仰』岡山県立博物館 2003.1
- ・ 『西大寺会陽五〇〇年と観音院寺宝展』岡山デジタルミュージアム 2009.1
- ・ 『岡山県金石史』1930
- ・ 太田直之『中世の社寺と信仰 勸進と勸進聖の時代』2008.5
- ・ 知念理一『兵庫県立歴史博物館蔵 仏涅槃図―過度期的作例の一様相―』『塵界』11号 1999.3
- ・ 拙稿『金陵山西大寺会陽起源の周縁について―忠阿創始説の背景―』『佛教文学』34号 2010.3

（なかやま・かずまろ 本学招聘研究員）